

伝統的言語文化の教材におけるICT教育の導入と指導法の理論化について

——文学史的展開をふまえた唐代伝奇小説『離魂記』を用いた言語活動の分析をもとに——

寺島 徹
樋口 敦士

小学校、中学校、高等学校の各段階において、国語の伝統的言語文化指導の中で言語活動を取り入れる動きはこれまでも数多く試みられてきた。^(注1)しかし、小中学校における伝統的言語文化の学習教材を用いたICT教育の実践や、高等学校の古典分野におけるICT教育の分析は、その素材の特徴も相俟って、それほど進んでいないといつてよい。^(注2)本稿では、漢文教材『離魂記』の言語活動を用いた授業実践の検証をもとに、伝統的言語文化素材、古典教材におけるICT教育機材導入による指導方法を構想しながら、理論化の可能性について考察する。

一 漢文教育における言語活動の構想

中央教育審議会答申(二〇一六年十二月)には、「我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手としての言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である」との見解が盛り込まれた。こうした伝統文化に関する学習においても、その興味や知識習得にとどまらず、言語活動をもとに、とりわけICT機材を利用した効果的な授業構想が求められていることは言うまでもない。伝統的言

語文化素材に対する知識、関心を育みながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現」に向けた授業改善を実現できるような授業設計が今後さらに推進されていくことになるだろう。コンピュータや情報通信のネットワークなどの情報手段を適切に活用しながら、学習活動の充実を実現するうえで、ICT教育機材の利点と効果を見きわめるための慎重な教材の吟味と授業計画および、評価への構想が当然のことながら不可欠である。

たとえば、小学校を例にあげるなら、現行の小学校学習指導要領(二〇一七年三月告示)総則の第三章の第3節教育課程の実施と学習評価「1主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」をみると、ICT教育に関して次のような記述がみえる。

(前略) コンピューターや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ること。(中略)

ア 児童がコンピュータで文字を入力するなどの学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得するための学習活動

イ 児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付ける

ための学習活動

これらは野中が指摘する^(注3)ように、小中高の国語教育を通して、不可逆的な動きであることは疑いなく、現在の状況から今後はさらに盛んになることが想像される。

本稿では特に高等学校における漢文教材を例に取りあげて、その文学史的背景から、言語活動を念頭においた授業の構想及び実践の検証に当たって、新型コロナウイルス感染症拡大以前に実践された漢文教材を用いた言語活動を俯瞰したうえで、ICT教材導入によりどのような教育効果が期待できるか検証する。

漢文教育の意義の一つとして中国古典文学の摂取という歴史的な事実がある。ただ、わが国の文学作品をいかなる形で受容されたのかは限られた授業時間数で取り扱うのは難しいかもしれない。漢文教材における文学教育について、鈴木修次は「文学のおもしろさを理論的に知り、考える習慣を身につけるといことが、文学教育の主要な方向として求められる」と述べており、さらに向嶋成美も唐代伝奇小説の魅力について怪奇な話柄を読者の興味を逸らさず巧みに展開する作者の豊かな想像力にあると指摘する^(注4)。改めて言うまでもなく、唐代伝奇小説がわが国の文学作品において多大な影響を与えた事実は疑い得ないものの、芥川龍之介『杜子春』や中島敦『山月記』のような近代文学の名作であっても、中国の唐代に取材した典拠の舞台設定を踏襲して翻案創作した近代小説を教材として取り扱う場合には、現代に生きる高校生にとってその背景知識なしには作品理解が成立しないという誤った印象を与えかねないことが懸念される。

現代社会において様々な娯楽文化を享受する生徒にとって唐代伝奇小説教材の「おもしろみ」について伝えることは実際に可能であろうか。従来型の一斉授業下の読解指導のみでは、現代の高校生に漢文小説「おもしろみ」を鑑賞させるのに不十分であるものと考えられる。

そもそも怪奇的な話柄に対して、果たして生徒が「おもしろい」、「興味がある」と反応する捉え方にも疑問が残るところである。むしろ、いたずらに「おもしろさ」を強調するよりは現代にも通用するプロットの汎用性に着目させる方法がより効果的であるとの結論に至った。

また、文部科学省初等中等教育局視学官の大滝一登は従来「読むこと」偏重型の古典の授業が「話すこと・聞くこと」や「書くこと」を等閑視した結果、古典嫌いの生徒を数多く生み出してきた問題点を提示している^(注5)。従来、唐代伝奇小説は和漢比較文学の見地からその趣向に焦点が当てられてきたものの、これまで「小説」の語源的意義に触れられることは少なかった。本稿は漢文における唐代伝奇小説教材の受容の観点から『離魂記』の翻案指導についての実践を報告し、改めてICT教育教材活用の可能性に焦点を当てた考察である。

二 漢文小説の受容をめぐる「小説」の語に着目して一

「小説」の語句は、『莊子』外物篇「飾小説以干県令(小説を飾りて県令を干む)」を典拠としており、『漢書』芸文志にも「小説家者流、蓋出於稗官。街談巷語、道聽塗説所造也(小説家者流、蓋し稗官に出づ。街談巷語、道聽塗説の造る所なり)」と見えるが、文字通り「取るに足りない議論、世俗の笑話」などのイメージしかなかった状況が窺える(魯迅『中国小説史略』上巻)。わが国ではこの「小説」の名称が現代に一般に使用されるようになったのは、坪内逍遙の『小説神髓』によるところが大きい。

近代以前に我が国の文学観の中で「小説」の語が話題にのぼったのは江戸時代のことであるが、これは現代の意味とは異なったものであった。江戸中期の儒医にして戯作者の都賀庭鐘は、「読本」の嚆矢に当たる『英草紙』(寛延二年(一七四九))という作品を世に出した

ことで文学史に大きな足跡を残した。この庭鐘について評判記には、「小説家の学者そふな」、「あれこれ小説集が板にござります」（『三都学士評林』明和五年（一七六八））と紹介するが、中村幸彦はこの「小説家」とは「白話（小説）の研究家」であると解釈している。^{註50}つまり、「小説家」とは中国白話小説の翻訳や翻案する人物を指しており、現代のいわゆる「作家」とは同義ではない。これに対して「物語」といえば、日本の古典文学を指すときに限定される。本居宣長も「中むかしのほど、物語といひて、一くさのふみあり。物がたりとは、今の世にはなしといふことにて、すなはち昔ばなし也」（『源氏物語玉の小櫛』）と述べている。それは「歌物語」、「軍記物語」、「歴史物語」などといった文学ジャンルを表す場合もあれば、『源氏物語』、『伊勢物語』といった個々の作品の題名にも取られている。江戸中期にも「物語」は多く登場したが、それは国学者賀茂真淵が『国意考』（明和二年（一七六五））において漢語の煩雑さを批判し、和文の重要性を主張したことによる。真淵の弟子筋に当たる建部綾足や上田秋成によって中国の白話小説の趣向を借りた翻案作品『西山物語』や『雨月物語』が世に問われたが、言うなればこれは一種の「小説（漢籍）」の「物語（和文）」化であったことを意味する。

明代以降、中国から『水滸伝』、『三国志演義』、『西遊記』などの白話小説が陸續と我が国に伝えられた。荻生徂徠の古文辞学派による白話受容と相俟って、唐話学習が盛んになり、江戸中期以降に大流行した。これに伴って、白話小説の趣向を借りながら日本風書き改められた翻案文学作品が文人間に広がった。こうした作品は一般に「読本」というジャンルに区分されるが、『水滸伝』を翻案した滝沢馬琴の大作『南総里見八犬伝』もその一つである。白話短編小説集『三言二拍』を抜粋施訓した岡白駒『小説精言』（寛保三年（一七四三））の序文には、東方朔『神異経』、張華『博物志』、干宝『搜神記』、任昉『述異記』

などに加えて、『漢武内伝』、『飛燕外伝』を指して「古の小説」と称し、さらに『虬髯客伝』、『紅線伝』、『聶隱娘伝』、『補江総白猿伝』といった作品もこれに類すると述べている。ここでは六朝志怪小説、唐代伝奇小説を総称して「小説」と呼んでいた事情が浮かび上がる。先の庭鐘も第二作『繁野話』（明和三年（一七六六））序文において「近路行者三十年前国字小説数十種を戯作して茶話に代ゆ」と述べているほか、平賀源内『風来六部集』（安永三年（一七七四））収録の『天狗鬍髯鑿定縁起』^{註51}には、門人戯蝶による「我が風来先生、戯に筆を採、多くの小説世に行れてより」という序文がある。ここでは「小説」に「よみほん」というルビが施されており、「読本」と「小説」が不可分な関係として捉えられたことがわかる。また、伊丹椿園『唐錦』（安永十年（一七八一））「小説ハ夷堅齋諧を祖とし宋の孝皇侍従に命じて日に民間の奇事を探りきかして太上慰めたまひしより通俗演義の一種始めて盛に行れ、元の施羅の二子巧みを究め妙を尽し、大に斯道を述たり」とあり、中国由来の文学作品で施耐庵の『水滸伝』や羅貫中『三国志演義』などに焦点が置かれている。上田秋成も『ますらを物語』の中で「もろこしの演義小説、ここの物語文、其作れる人のさかし愚にて、世にとどまる」と使い分けている。

明治十八年（一八八五）に発表された『小説神髓』には、人間の心情から小説は描くべきことを説きながら、功利主義や勧善懲悪的な文芸を退けた。それまでは戯作者の地位は低く卑しめられていたが、逍遙の「小説は美術なり」の一言によって高められた。翌十九年（一八八六）、尾崎行雄は「Novel」の訳語として「小説」の語が使用されたことに触れている（末広鉄腸『雪中梅』序文）。

近代以前は第一義的に中国由来の散文学作品を意味した「小説」が翻案を通じて我が国の散文学を指す用語としても使われたが、近代に入ると坪内逍遙等によって読み換えられて新しい意味が付与され

たことになる。つまり、「小説」も近代以降に改めて誕生した「日本漢語」的な側面を持つていたことは注意したい。中国由来の散文作品は「小説」の語を介してわが国の文学作品に積極的に受容されていたことがわかる。つまり、「小説」の語そのものが語源的に伝統的言語文化の中に位置づけられる文学教材だと言えるのである。^(注7)

三 唐代传奇小説『離魂記』の受容―『離魂譚』の系譜―

唐代传奇小説の中でも中唐の陳玄祐の作とされる『離魂記』は後世への影響が大きいものである。『太平広記』巻三五八には「王宙」の表題で所収され、末尾に「出離魂記」の表記があることから、当時より『離魂記』と呼ばれる典拠があった内実が窺える。これに由来する「離魂病」の名称とともに作品を通じてわが国にも受容された。その内容は、清河の張鑑には男子なく女子二人がおり、容姿端麗であった次女の倩娘が、相愛の王宙との仲を妨げられたことにより、倩娘の魂が肉体から遊離して王宙のもとに走り思いを遂げる話である。こうした肉体から魂が離れる「離魂譚」は、既に東晋時代の陶淵明の作とされる『搜神後記』にも見られるが、こちらは夫側の離魂譚である（巻三「形魂離異」）。「離魂」の語は既に盛唐李杜の漢詩にも見え、『離魂記』が初出ではない。李白「離魂不散煙郊樹（離魂散せず煙郊の樹）」（下途帰石門旧居）、杜甫「再哭経過罷 離魂去住銷（再哭経過罷、離魂去住銷す）」（哭王彭州掄）などが見えるように、もともととは男女間の恋愛譚に由来するものではなかった。その後、北宋期の五祖法演が「倩女離魂那箇是真底（倩女の離魂那箇か是れ真底）」と衆僧に問い、倩女の本体と精神のどちらが本物であるかといった公案を提示した（無門慧開『無門関』、東陽英朝『宗門伝灯録』巻六）。さらに元代の鄭光祖により「倩女離魂」に翻案戯曲化されて世に広まった。明

代の瞿佑『剪灯新話』巻四には一人の男性をめぐる姉妹の「離魂」が感応するといった内容の『離魂記』の翻案作品「金鳳釵記」が掲載されている。

『離魂記』についての先行研究は以下のようなものがある。内山知也は大暦年間という時代背景及び実在の宰相張鑑の人物形象も作品中に加えられたものと読んでおり、閻小妹は不名誉な駆け落ち事件は当事者王宙の知り得た情報に張氏の許可のもとで公表されたと推測する^(注8)。また、陳明姿は和漢の「離魂譚」受容の違いに着目し、『離魂記』と『源氏物語』の「賀茂の車争ひ」における六条御息所の生霊の比較を試みており、前者が「かくありたい」人生の願望遂行であるのに対して、後者は「ものあはれ」に基づく宿命的な業である人間存在の不測性と欠如性が漂っている点に違いが見られると指摘する^(注9)。また、よみ人知らず「恋ひて寝る夢地にかよふたましひの馴る、かひなくうとき君哉」（『後撰和歌集』巻十二）、和泉式部「もの思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」（『後拾遺和歌集』巻二十）にも詠まれているように平安時代には既に「離魂譚」の影響が和歌にも垣間見える。室町時代には一休宗純『狂雲集』「離魂倩女謫扶桑」、心田清播『心田詩稿』「他夜離魂更夢魂」と漢詩文にも詠まれる。

雑俳集『誹風柳多留』には「離魂病元祖天正十二年」（一六六篇）と詠まれたが、江戸時代には「離魂譚」が多く散見できる。ちなみにこの天正十二年（一五八四）は小牧長久手の戦いが起きた年でもある。まず、善斎『膾余雜録』巻一（承応二年（一六五三））には『離魂記』の後続作品である「倩女離魂」や「金鳳釵記」に触れるほか、わが国の『元亨釈書』所収の「安珍清姫」伝説との比較を行なっている。「倩女離魂」の話が『合類大因縁集』（貞享三年（一六八六））巻十一「雑門 信疑部」にて紹介されるほか、翻案小説『剪灯新話』「金鳳釵記」については中村某『奇異雑談集』巻五（貞享四年（一六八七））や林

羅山『怪談全書』巻四（元禄十一年（一六八九））に翻訳され、浅井了意の『御伽婢子』巻二（寛文六年（一六六六））「真紅撃帯」には越後国の事柄として翻案されている。その一方で、「離魂病」という現象についても諸書に取り扱いがある。『曾呂利物語』巻三（寛文三年（一六六三））には出羽国守護の身内の女性変化について「いかなる事ともわきまへかぬるたるが、ある人のいはくりこんといふわづらひなり」、井原西鶴『新可笑記』巻四（元禄元年（一六八八））に「離魂」といふ病の類ならん」とある。また『本朝故事因縁集』巻四（元禄二年（一六八九））や林義端『玉篋子』巻一（元禄九年（一六九六））には、享禄年中に河野通直の妻女が離魂病にかかった記事が載せられ、両書には医者が「離魂病」、禪僧が「倩女離魂の話」などと答える場面が見られるほか、浮世草子には、夜食時分『好色敗毒散』巻五（元禄十六年（一七〇三））「さるかたの十七君の女郎に離魂病とりつきけるを」と抱え主の嘆きが記され、北条団水『一夜船』巻三（正徳二年（一七二二））には、箕島殿の娘が中將に輿入れに際してこの症状が現れ、「密密の儀なりと申せども、りこんびやうとて世にけうなるきびやう、ぞくにかげの煩ひといふ物なり」とある。「離魂病」は本草書や医学書にもしばしば登場し、李時珍『本草綱目』巻十二「草之一山草類三十一種（人參）」には「離魂異疾」の一項がある。

有人臥則覺身外有身、一樣無別、但不語。蓋人臥則魂歸於肝、此由肝虛邪襲、魂不歸舍、病名曰離魂。用人參、龍齒、赤茯苓各一錢。（人有り臥すときは則ち身外に身あることを覚ゆ。一樣にして別無く、但だ語らず。蓋し人臥すときは則ち魂 肝に歸す。此れ肝虚に由りて邪襲ひて、魂 舍に歸せず。病名を離魂と曰ふ。人參、龍齒、赤茯苓各一錢を用ふ）。

ここでは「離魂」の症状に加えて、薬剤の処方についての記述がある。寺島良安『和漢三才図会』巻六十一正徳二年（一七二二）「辰砂」

の項には「治スニ離魂病^{カククツツラヒ}」の処方が見える。この他に下津寿泉「奇疾便覽」巻二（正徳五年（一七一五））には、「夏子益奇疾方二曰ク人アリ忽自形兩人ト成テ真假ヲ別コトヲ不^{わか}レ得。言ズ問ドモ亦対コトナシ。乃是離魂ナリ」とある。安藤昌益『稿本自然真営道』巻三十七「人相視表知裏」巻三にも「離魂病 是レ己^{おの}レ此^{こゝ}ニ煩ヒ伏シテ在レドモ、常ニ身ハ彼ニ在リ」とある。儒者の用例としては、古賀侗菴『泣血録』には父精里危篤の際に「如夢如覚之際、覚魂不守体判然分処、如小説所載離魂病者自知距死不遠（夢のごとく覚むるがごとくの際、魂 体を守らずして判然と分くる処、小説に載する所の離魂病のごとき者と覚え、自ら死を距つること遠からざるを知る）」と述べたことを報告する（文化十四年（一八一七）二月八日）。また、橘南谿『北窓瑣談』巻四（文政十二年（一八二九））には、越前国敦賀原仁右衛門の下女の轆轤首の知らせを受けて「妖怪にてはなく（中略）離魂病の類なるべし」との診断がある。浄瑠璃では、竹田出雲『蘆屋道満大内鑑』四段（享保十九年（一七三四））「思ひも寄らぬ二人の葛の葉、けふもあすも覚め果しが退いて分別するに離魂病といふ病有り、俗には影の煩といひ、形を二つに分るといへども、それも一つ軒をば離れず、時々形を合すといへば、それでもなし」と見える。

また、後期読本の中にも「離魂病」は積極的に受容されて描かれている。^(注12) 十返舎一九『怪物輿論』巻五（享和三年（一八〇三））には好色により死亡した美女小桜が悪霊となつて祟りをなした場面「凡人の臥て其形兩人となるものは、医書にいへる離魂病なり」、山東京伝『桜姫全伝曙草紙』巻三（文化二年（一八〇五））には桜姫が二人に別れた箇所「こはいかなる怪異ぞ、世に離魂病と云ぬもの、類にや」、滝沢馬琴『占夢南柯後記』巻三（文化八年（一八一二））には遺骸が二つに別れるといった奇事「世に離魂病とて、形貌のふたつに見ゆる病ありとは聞けど、死して亡骸の、ふたつになるといふ事は、聞も及

ぬ珍事なり」、『近世説美少年録』第五十五回（弘化三年（一八四六））「その伍六健宗はいぬる日既に我館に来て、今も猶宿所に在り。離魂病ならざる者、何ぞ両箇の健宗あらんや」などと記されている。

さらに、韻文においても「離魂病」に盛んに詠み込まれた。豊島露月編『たから船』（元禄十六年（一七〇三））には丹水評の「わくる物二妻狂ひはりこん病」の句が載る。平秩東作編『狂歌百鬼夜狂』（天明五年（一七八五））「離魂病」には「目の前に二つの姿あらはすは水にも月のかけのわづらひ」（宿屋飯盛）、天明老人編『狂歌百物語』巻三（嘉永六年（一八五三））には「離魂病看病するもかれこれに身二つ欲しと思ふ忙しさ」（松梅亭慎住）、「離魂病人に隠して奥坐敷おもてへ出さぬ影の煩ひ」（尚丸）、「かけがひのあらぬ娘の離魂病一人死ねとや親の思はん」（神風屋青則）、「こやそれと文目もわかぬ離魂病いづれを妻と引きぞ煩ふ」（館林 美通歌垣）、「見る影もなき煩ひの離魂病思ひの外に二つ見る影」（腹光）などこちらには諧諷的に詠み込まれている。このほか、『誹風柳多留』一三八篇（天保六年（一八三五））には「離魂病ほどに添寝の女形」（如雪）も見られる。

明治初期に日本を来訪した清末の外交官黄遵憲は『日本雜事詩』の中で、当時の写真屋について「竟将靈葉撰離魂（竟に靈葉を將て離魂を撰す）」と詠み込んだ。写真撮影を「離魂」の一種に見立てたのである。近代文学作品から「離魂病」をモチーフに取り扱ったものに田村俊子『離魂』（明治四十五年（一九一〇））、岡本綺堂『離魂病』（大正十四年（一九二五））などの短編小説の標題として用いられている。この他に「離魂病」の用例を拾えば、枚挙に暇がない。「風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書齋に来て居る以上は鏡が離魂病に罹つたのか又は主人が風呂場から持つて来たに相違ない」（夏目漱石『吾輩は猫である』明治三十九年（一九〇六））、「もし離魂病と云ふものがあるとしたならば、花房は正に藤沢の離魂体とも見るべき

人間だつたが、どちらが正体でどちらが影法師だか、その辺の際どい消息になると、まだ俊助にははつきりと見定めをつける事がむづかしかった」（芥川龍之介『路上』大正八年（一九一九））のほか、夢野久作『ドグラマグラ』（昭和十年（一九三五））がある。これは幻想小説とも呼ぶべき作品かもしれないが、ここで「私」が正木教授から「離魂病」に罹患しているとの説明を受ける場面がある。

「ウン／＼。迷ふ筈だよ。……君は昔から物の本に載つてゐる離魂病と云ふのに罹つてゐるのだからね……」

「……エ……離魂病……」

「……さうだよ。離魂病といふのは、今一人別の自分があらはれて、自分と違つた事をするので、昔から色んな書物に怪談として記録されてゐるが、精神科学専門の吾輩に云はせると、学理上実際にあり得る事なんだ。しかし、そいつを現実、目の前に見ると、何とも云へない不思議な気持ちがあるだらう」

（『ドグラマグラ』）

こうした用例からも「離魂病」が単なる昔話の怪奇現象としての取り扱いではなく、近代の文学作品に堪え得る重要なプロットであったことは間違いない。唐代伝奇小説『離魂記』は、千年以上の時を経て「倩女離魂」、「金鳳釵記」などの後続の翻案小説を生み出し、またわが国では「離魂病」と称された現象が、近世の仏書、本草書、医学書、戯作などに多岐にわたって記録され、近代文学においても多くの作品に登場している形跡が窺える。『離魂記』は内容そのもののみならず、「離魂（病）」なる言葉が原語を離れて独立した用語として現代まで脈々と受け継がれてきた状況が理解できるはずである。以上より、漢文由来の文学受容の「小説」翻案創作に加えて、「離魂譚」のプロットは言語活動教材として最適なものと考えられる。

四 唐代伝奇小説『離魂記』実践指導案―翻案を用いて―

二〇一八年三月に「高等学校学習指導要領」が告示された。ここでは二年前の中教審答申を受けて「主体的・対話的で深い学び」の実現（総則）が盛り込まれた。次年度より新設される「古典探究」の目標には、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語での確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とあり、伝統的な言語文化に対する理解、論理的に考える力、豊かに想像する力、古典を通して先人のものの見方・感じ方・考え方を伝え合う力を高めることなどが謳われている。樋口は以前、唐代伝奇小説『枕中記』指導の際に、栄適観をテーマに翻案創作させる実践を行った。^{（注13）}生徒の創作意欲をかき立てるには最適な素材となったが、こちらではあくまで舞台背景や登場人物などの趣向を典拠から借り受けることが作品受容のうえで必須となるという制約があった。これに対し、前節で確認したように『離魂記』は「離魂」のエッセンスとして後続の作品に取り込まれた歴史を有している。長谷川滋成はこの『離魂記』を教材に取りあげて「継続談・後日談」を創作させる実践を報告しているが、当該教材の世界観の枠にとどめず、むしろ「離魂譚」のプロットのみを採用して舞台設定を自由にとつて翻案創作させる方が、作品受容の伝統的な観点からも効果的であると考えた。

以下、現行の高等学校校指導要領告示の同年十月に実施した高等学校三学年における『離魂記』を用いた翻案実践を紹介する。当該授業の全配当時間を四時間とし、講義解説および翻案発表（グループ討議・翻案創作・発表作業）をそれぞれ二時間とした。本実践の手順は二時間の講義解説後、四〜五名のグループ座席に配置し、ここでワークシートに配布。十五分間の印象に残った表現や創作可能な場面設定に

ついて話し合わせる。

その後、約三十分の時間をとり、各個人による「離魂譚」をテーマにした原稿用紙八百字程度の翻案創作に取りかからせる。次の時間までに作品を完成させる旨を伝え、未完成の場合は宿題とする。四時間目は同グループの中で各自の翻案作品を持ち合わせて、各自の班内発表の後、グループ代表者を決めて全体発表によりまとめとする。

【授業の実際】

一、二時間目は授業における当該教材の講義解説であるためここでは割愛し、三、四時間目のグループワークを詳述する。まず三〜四人のグループに座席を配置して、ワークシートを配布。十五分間でテキストの内容確認を踏まえつつ翻案しやすいプロットについても自由に話し合わせた。討議項目と生徒から寄せられた主な回答結果は以下の通りである。

① 『離魂記』を一読した感想

- ・ 倩娘が分身して王宙を追いかけた者と家にとどまった者がいたことに驚いた。
- ・ 数里離れた村に裸足で追いかけた倩娘の思いはすごい。
- ・ 今まで読んできた漢文は道徳的なものが多かったが、こうした作品は新鮮だった。

・ 日本のお話でも似たような話があると思った。

・ 現代では恋を肯定的に捉えるが、昔は非常識な行為だった。

・ 物語の終わり方に続きがありそうで気になった。

② 『離魂記』の中で印象に残った表現

- ・ 「出与相迎翕然而為一體、其衣裳皆重」
- ・ 「私感想於寤寐」 ・ 「胡顏独存也」
- ・ 「飾粧更衣笑而不語」 ・ 「君厚意如此寢食相感」

③ 『離魂記』の中の疑問点

- ・ 王宙のもとに向かった倩娘は魂なのか身体なのか。
- ・ 分離した際の倩娘の記憶はどうなっているのか。
- ・ なぜ父のところに戻ろうとしたのか。
- ・ どうやって離魂後に子供を生んだのか。
- ・ 父は娘の離魂について深く考えていないのか。
- ・ 王宙のもとに行ったときの倩娘の魂はどんな姿をしているのか。
- ・ 五年間寝たきりの状態で倩娘は一言も話したりしなかったのか。

④「離魂譚」をもとに翻案しやすいテーマ

- ・ 二重人格 ・ 幽体離脱(ドッペルゲンガー)
- ・ ナルトの影分身 ・ 心身二元論 ・ かぐや姫
- ・ 黄金魂冒険記 ・ ドラゴンボール
- ・ 仮面ライダーゴースト ・ ワンピース
- ・ 洋画「ゴースト」 ・ 苦手な授業で現実逃避
- ・ ライブコンサート当選後に部活動の合宿がかぶった状況

その後、約三十分の時間をとり、各個人による離魂譚をテーマにした原稿用紙八百字程度の翻案創作に取りかからせた。次の時間までに作品を完成させる旨を伝え、未完成の場合は宿題とした。四時間目は同グループの中で各自の翻案作品を持ち合わせて、互いに読み聞かせる場として設定した。班別発表の後、グループ代表者を選出して全体発表へと移った。以下に全体発表を行った代表生徒の作品の中から三例を掲げる。

①「重い本」 (高校三学年女子)

とある本がある。読むと魂が抜けるという本。今回、私はその本のありかを探し出した。寂れた廃墟の一室に埃をかぶっていた本は妙に不気味で、ひどく興味をひかれた。恐怖にも勝る好奇心のままに手を伸ばす。想像よりもはるかに重い本。その重さに少し

の疑問を抱いたが、すぐに興味が上がって、家に持ち帰った。その場ですぐに読みたかったが、何年も掃除されていない汚れた部屋では集中できそうにない。家に着く手前で本の埃を払う。先程まで気づかなかったが、とても鮮やかな赤色の表紙だった。風呂に入り、柄にもなく少し手の込んだ料理を作った。私はそれほどまでに浮かれていた。赤色の重い表紙をめくる。冷たく乾いた音が続いた。何も起きないではないか。やるせない気持ちで少しでも晴れさせようと、冷たいものを取りに行く。ふと姿見に視線を移した。私の姿がない。手に視線を向ける。ちゃんとある。ちゃんと動く。姿見に視線を戻す。そこに私の姿はない。頭がおかしくなったのか思考が回らない。慌て、転ぶ。積んだあった本が崩れ落ちて、私の頭を：通り抜けた。何が起きたのか全くわからない。回らない頭で何とかまわりを見回す。今までそこにいた場所に私があった。這いずりながら近寄る。静かに呼吸をしている。触れることはできなかった。それから丸二日、眠っている私は起きなかった。あの本は：。唯一、こんな非現実的な現象を引き起こすとしたらあれしかない。だが、部屋のどこを捜しても見つからない。私はかすかな希望を胸にしてあの廃墟に向かった。二日前に訪れた寂れた廃墟の薄汚れた一室に埃を被っている本。―ああ、そういうことか。―

私は本に手を伸ばした。埃とともに本に群がる無数の手に、重さを感じながら。

②「友との約束」 (高校三学年女子)

ある日の深夜、石工のセリヌンティウスは王城に召された。人を信じることができない暴君ディオニスの面前で竹馬の友メロスと二年ぶりに再会した。話を聞くと、どうやらメロスは邪知暴虐の

王に激怒し、王城に入つて警吏に捕まつてしまった。処刑されることになったメロスは王に「友を人質として城に置き、三日間だけ自由にしてくれ。三日目の日没までに戻らなければ友を殺してもかまわない」と申し出た。その話を聞いた私はメロスを信じ、人質となることを受け入れた。

メロスが城から出て一日目。牢屋の中にいた私に王はこういった。「セリヌンティウスよ。哀れだな。一人の友人を信じたせいでお前は死ぬのだ。奴はきつともう戻つてこない。人は皆自分が一番なのだ。友人より自分の命を優先させるに決まっている」王は嘲笑つた。私はこのように言い返した。

「王は彼の何を知っていると云うのだ。彼は単純な男だが、決して嘘をついたことがない。彼はいつも正直者だったから私は彼を最後まで信じて待つ」

それを聞いた王は呆れて私の前から姿を消したのだった。

三日目、私は刑場で処刑されそうになっていた。この時だけ私は彼を疑つてしまった。王の言つた通り彼は来ないのではないかと。私の体が釣り上げられそうになった時、群衆の中からぼろぼろになったメロスが出てきた。間に合つたのである。縄がほどかれると「メロス、私を殴れ、私は生まれて初めて君を疑つてしまった」と私は言った。メロスは優しく微笑み、「すまない。今の私には君を殴れない。実はここに来る途中、豪雨で土砂崩れにあつて流されてしまったのだ。私は君との約束を守るため、神に助けを求めた。神は私の体から魂を分離させ、『三日以内に体のところまで戻れ』と伝えたのだ。ゼウスよ、私の体を捜したまえ。そしたら、君を殴り、許そう」と言った。私は今全速力で走っている。大切な友人を助けるため、今度は私が約束を守るため。

③「現代版離魂記」 （高校三年生女子）

内定が決まった倩娘は本当にそれでよいのか悩んでいた。このまま就職して働けば安定した収入を得て、いずれ倩娘は社会的地位を手にすることが出来るだろう。しかし、倩娘はやりたいことは別にあつた。彼女の両親は娘の幸せを望んでおり、内定が決まつた際にはとても喜んでくれた。そんな両親を裏切ることができない。この最中、先輩から絵画コンクール出場の誘いを受ける。倩娘は後ろめたい気持ちもあつたが、この機会に大賞を受賞し、絵を一生の仕事にしてもいいのではないかと思ひ至つた。両親に気持ちを打ち明けると、彼らはすぐに顔色を変えた。「親不孝者だ」と父は怒り、「困らせるようなことを言わないで」と母は泣いた。確かに彼女が自活できるようにこれまで多くの援助を惜しまなかつた。しかし、自分が本当に幸せになるためには、絵の仕事に就き、自身を表現することだと確信した。倩娘は夜中に家を飛び出し、先輩の家でコンクールに向けて作品創作に専念した。様々な苦難を乗り越え、周囲から認められるようになったころ、テレビ取材の仕事が舞い込んだ。取材を受けて放送されれば、あれから会つていない両親も自分の活躍を認めてくれるだろうと思つた。テレビ放送後、周囲の人々からの連絡の中に母からのメールがあつた。

「あなた、会社で働いているんじゃないの？」

意味がわからなかつた。倩娘はあの夜逃げ出したのに、なぜ母はそう思っているのか不思議だつた。急いで実家に帰ると、玄関脇でうづくまつているもう一人の自分がいた。彼女は「反対されても自分の好きなことに挑戦すべきだった」と一言口にする、前のめりに倒れ込んでしまつた。必死に受け止めようとしようとしたときに彼女の姿は既になく、残つたのは少しやつれた自分の姿であつた。

①は典拠の恋愛話がホラー仕立てに改変されており、重い本にまつわる無数の靈魂の様子が描かれている。②は『走れメロス』に趣向を借りながら友人セリヌンティウスの視点から、メロスの遊離魂と対話する物語となっている。③は『離魂記』の登場人物を用いて現代に置き換えた作品であり、就職で反対された美術系女子である画家倩娘が登場し、夢と現実の間で揺れ動く様子をややコミカルなタッチで描く。いずれも典拠から離れてホラーからコメディまで舞台設定を自由に「離魂譚」を翻案している様子が窺えた。生徒の受容態度は概して翻案創作を楽しむ一方で、典拠「離魂記」の内容確認にも余念がなかった。実践後の自己評価からは四十三%の者が「A（当該教材の理解及び説明可）」、五十六%の者が「B（当該教材の理解）」と答えており、各生徒の主體的な読みが深まったとの結果が得られた。今回の実践の感想及び課題としては、同一テーマでも生徒により話柄の内容や結末が異なり、いろいろな考えを持つことができた肯定的な意見が寄せられた一方で、もっと表現内容に工夫を凝らせばよかったとの反省点も浮かび上がった。上記からは、『離魂記』に対する関心の高さが窺われ、なじみのある趣向であり、生徒同士の作品鑑賞を通して同一テーマでも異なる作品が生じるといった翻案の実態に気付き、さらに表現力を高めていきたいという前向きな課題にもつながった。

芥川龍之介『杜子春』、中島敦『山月記』を挙げるまでもなく、近代の名作誕生の背景にも漢文の唐代小説が翻案を通じて積極的に日本に受容されてきた伝統がある。また、近世までは「小説」とは第一義的に中国の散文作品を意味し、翻案を通じてわが国の文学作品に摂取されてきた。さらに、『離魂記』に関して言えば、「倩女離魂」や「金鳳釵記」などの後続作品を生み出し、わが国でも「離魂（病）」なるプロットが諸書にも取りあげられて現代に至っている。こうした点を踏まえて実践指導することで、古典の授業の枠にとどまらず、わが国

の近代文学にまで深い影響を与え続けてきた状況について生徒の教材理解に資するものとなり、創作表現の学習材として有効なテキストであると考えられる。

生徒の回答からは類似のプロットは数多くの作品から散見され、なじみある題材であったことも窺える。従来の一斉講義型授業よりも、その趣向を借りた翻案創作を生徒に体験させることで教材理解の深化にもつながる結果となった。今年度、新設された科目「言語文化」にも採録された村上春樹の「鏡」という短編作品にも江戸時代の『百物語』を通じて「離魂譚」の影響が指摘されており、現古融合型の教材としても着目することが可能になる。

従来の「読むこと」を重視した一斉講義に終始することなく、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の要素を積極的に取り入れることで、教材理解への深化の効果をねらったものである。今回の実践を通して互いの作品鑑賞を通して創作意欲も高まり、多くの生徒が楽しみながら自由に翻案作業に取り組んでいた様子が見受けられた。唐代伝奇小説『離魂記』には「小説」や「離魂」の観点を踏まえることで効果的な授業展開に繋がると結論づけられた。今に至るまで「離魂（病）」は一般用語として幅広く使われており、当該小説が現代に生き続けていることを示すうえで最適な教材であると言えるのではなからうか。

五 ICT技術を用いた授業構想

このような漢文教材を用いた言語活動をより教育効果を高めるために、どのようなICT教育機材の導入ができるか、ここでは従来の紙媒体を用いた実践報告との比較考察を通してその可能性を論じる。

本実践において、従来型の紙媒体を中心とした実践報告との比較を通してICT機材の活用により、いかに効果的な言語活動が展開でき

るかという側面からの検討が重要となるだろう。ICT教材導入に際しては、第四節の翻案創作指導実践において特に有効となることが考えられる。特に、『離魂記』の初読の感想、「小説」や「離魂（病）」の用例の提示、翻案創作執筆、事後アンケートの観点からICT教材がどのように有効になるか以下に検証する。

樋口の勤務する狭山ヶ丘高等学校では二〇二〇年四月より「Google Workspace」（旧称「G Suite」）の段階的な導入が試みられてくる。今回の実践報告を踏まえながら、具体的に「Google Workspace」導入に照らした検討を進めたい。

唐代伝奇小説『離魂記』の翻案創作に当たっては、「離魂（病）」の用例紹介について「Googleスライド」で作成した資料をプロジェクトに映し出して説明を施す。また、生徒には各自の翻案創作作品を「Googleドキュメント」にて作成させたうえで、「Googleドライブ」上にて文書を提出させる。さらに、実践前後のアンケートを「Googleフォーム」にて報告させることで、教員は「スプレッドシート」上で集計したコメントやグラフの表示も容易になる。こうした一連の動きは実践報告を可視化して教育効果を検証するうえで大変有効な手段となるため、これから言語活動とICT教材はさらに普及していくことになると思われる。今回の実践結果を紙媒体のワークシート等でまとめようとする、ワープロソフト等で編集作業を行う教員側の負担は相当なものとなる。言語活動におけるICT教材導入により、教員はそれまでの文書処理作業の労力から解放され、翻案創作文に対する観点コメントなどの効果的な個別指導に注入することも可能となり、教科指導の質の担保という面でも有益であることが考えられる。このような創作と鑑賞をベースにした言語活動の取り組みの場合、同じ配当時間であっても、鑑賞及び批評の重層化が容易に実現できることとなる。つまり、言語活動の取り組みをポートフォリオ化しやすく、形

成的な評価をおこなう上でも効果があることが予想される。特に、事後アンケートの集計時の「Googleフォーム」の活用は、指導者の情報管理及び教育効果の検証においてその力を遺憾なく発揮することになるだろう。

今回は高等学校における漢文教材を取りあげたが、こうした言語活動を効果的なものにするためのICT教材利用の試みは、小学校、中学校などのそれぞれの発達段階に合わせた伝統的な言語文化素材にも応用可能なものになると考えられよう。つまり、ICT教材を活用により個々の理解度に応じた個別最適化の授業が実現できることも予測される。一斉授業のデメリットの^(註)一つに、個々の学習者の理解の差に対応できないことが挙げられるだろう。デューイなどの課題解決型学習提唱において、その問題点解消は古くから試みられている一方で、伝統的文化素材や古典教材は現代の文章を扱う場合よりもその理解、興味の差は著しいものがあるといった課題は、かねてより指摘されてきた。ICT教材を積極的に導入することにより、その障壁は^(註)ずいぶん緩和できるものと思われる。漢文教材などの高度な伝統的言語文化の素材であっても、グループワークを通して個々の学習者の進捗状況に応じて、他者の意見に耳を傾け、お互いに影響しあい、理解を深めることが可能となる。特に、先述したICT教材によるインタラクティブな試みは、「Google Workspace」「Teams (Microsoft)」「ローノット」などの普及に伴い、相互交流における学習者の気つきと理解を飛躍的に上昇させることであろう。また、適宜クラウドなどによる同期技術も活用することで、それぞれの理解力に応じて、自由な空間、時間で作業を進めたり、単元を振り返ったりしつつ、個々の興味を最大限にのばす形で学習を深めることも可能とする。

経済産業省は、二〇一八年六月二十五日に「誰一人取り残すことない、公正に個別最適化された学び」の実現を提言しているが、その実

現に向けて様々な取り組みの提案とその検証が必要である。今回のような古典教材をICT技術を活かした言語活動の中でどう構想しているのか、教材の特性にあわせた構想と検証が今後さらに求められるのではないだろうか。

*

本稿では、唐代伝奇小説『離魂記』を用いた実践報告の検証をもとに、ICT教材導入による言語活動の可能性について論じた。今回、取りあげた実践報告はあくまで新型コロナウイルス感染拡大以前の状況であったことから、ICT教育教材についての具体的な導入はない。ただ、一斉授業を主体としたものではなく、言語活動を取り入れた古典教材の実践授業は、小学校、中学校、高等学校を通して単なる古典的知識の涵養にとどまらず、児童生徒自ら主体的に取り組む態度を培うことを可能にすることは当時から既に検証されていた。魅力的な学習材と効果的な指導方法の考案は、学習者自身が積極的に伝統的な言語文化に親しむ態度を培ううえで大変重要である。先述したように、言語活動とICT教育とは親和性があり、導入の仕方でも今後さらに普及していくことになるだろう。言語活動の取り組みに加えて、タブレット、OHCやプロジェクトなどの投影機、動画編集、それによる相互的な学習活動を支えるICT教材を積極的に活用することでも、ともすれば児童生徒の受動的な参加により、限定的な効果しか期待できなかった従来型の一斉授業を見直す契機ともなり得よう。現在の教育の転換期に際して、新たな取り組みを導入することで、伝統的言語文化素材の印象が大きく変容する可能性があることを指摘しておきたい。

【注】

- (1) 野中潤「ICTの活用で国語科教育をどう変えるかー言語文化「読むこと」(近代以降)」の新しい授業づくりと評価(特集「現代の国語」『言語文化』の授業ー必履修科目の授業づくりと学習評価』(二〇二二春)等参照。
- (2) 高等学校の実践などで少しずつ計画、構想、実践されつつあるようである。たとえば、埼玉県高等学校国語科教育研究会における「ICTを活用した授業実践」(『研究集録/埼玉県高等学校国語科教育研究会「編」』六一)等の実践事例の報告など。
- (3) 野中潤「教育ICTと国語教育学の課題(一)」(『都留文科大學研究紀要』八五 二〇一七年)に、国語教育にとって、ICT導入が不可逆的なことについて論証している。
- (4) 鈴木修次「教材研究と指導法(文学)」二三二頁。(『漢文教育の理論と指導』大修館書店 一九七二年二月)、向嶋成美「小説教材の意義」(大修館書店『漢文教室』一八八号 二〇〇二年二月)
- (5) 大滝一登「高校国語の不易と流行を見定める」一一〇〜一一二頁。(『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編』明治書院 二〇一八年十二月)
- (6) 中村幸彦「都賀庭鐘の中国趣味」(『中村幸彦著述集』十一巻 中央公論社 一九八二年十月)
- (7) 寺島徹・樋口敦士「江戸期の古文教材の授業導入についてー「物語」と「小説」の考察を踏まえてー」(『桜花学園大学保育学部研究紀要』一〇号 二〇一二年三月)にも「物語」と「小説」の違いを踏まえた古文教材の実践がある。
- (8) 内山知也「唐代小説離魂記考」(『漢文学学会報』二七 一九六八年六月)
- (9) 間小妹「唐代伝奇『離魂記』の虚と実」(『信州大学人文社会科学研究』九 二〇一五年三月)
- (10) 陳明姿「文学の中の遊離魂ー『離魂記』と『源氏物語』を中心としてー」(『集

- 刊東洋学』五三 一九八五年五月)
- (11) 木村迪子「勸化本に見る近世仏書の特質―「倩女離魂」を例として」(『近世文藝』一一五号 二〇二二年一月)では、「離魂記」の仏書における展開が詳述される。
- (12) 播本真一「『怪物輿論』と『奇疾便覧』」(『国文学研究』一一五 一九九五年三月)
- (13) 樋口敦士「唐代伝奇小説『枕中記』の鑑賞指導―『翻案』に着目して―」(『早稲田国語教育研究』三六集 二〇一六年三月)
- (14) 長谷川滋成「(9)後日談・継続談を書く」(『漢文の指導法 第二版』 溪水社 一九九二年六月) また、「離魂記」の教材性を早くに指摘したものに、中川薫「離魂記」雑考」(『鳥取大学学芸学部研究報告(教育科学)』一九六二年十一月)がある。
- (15) 善塔正志「離魂の造型―『鏡』と古典作品―」(『明石工業高等専門学校研究紀要』六〇 二〇一八年二月)
- (16) 小池由美子「ICTを活用した個別最適化の授業事例―国語科の指導法に関する授業研究」(『児童文化研究所報』四二 二〇二〇年三月)では、ICT教材を用いた個別最適化の重要性に着目している。
- 〔付記〕 本稿は、科研費(21K00285)の調査の一部である。本研究で引用した授業の実践調査については、調査当時に、狭山ヶ丘高等学校の許可を得ており、また、生徒たちにもコメント掲載の可否について、事前に了解を得ている。